

〔スポーツ社会専攻小特集〕

特集にあたって

スポーツ社会専攻は産業社会学部の2007年度カリキュラム改革において新たに開設された専攻である。本専攻がめざす教学目標は余暇・スポーツに関する現代社会の諸問題を社会科学の観点から鋭利に分析し、課題の解決を通じて新たな社会のありようを構想することにある。専攻完成年度にあたる2010年度を迎えるに際して、専攻では教育はもとより専攻教員の研究成果を社会化することを確認した。今年度専攻では教学の国際化を進める観点から諸外国の余暇・スポーツ状況の把握ならびに国外研究者や研究機関とのネットワーク形成を重視したが、本小特集はこうした取り組みの成果の一部である。

本小特集は3つ論文によって構成されている。

ミヒャエル・クリューガー論文「ドイツスポーツの60年」は、立命館大学で開催されたスポーツ社会専攻主催の特別研究会「ドイツにおける社会科学とスポーツ科学の関係を探る——学問分野としてのスポーツ歴史・社会学の過去・現在・未来——」（2010年10月8日）にゲスト講師として招聘されたクリューガー教授（ミュンスター大学スポーツ科学研究所長）が用意された講演論文の翻訳である。本論文のあらましは「ドイツスポーツの60年——ドイツ連邦共和国建国60周年を記念したドイツ・ドイツ間のスポーツ史に関するエッセイ」と題されて『スポーツ科学』（*Sportwissenschaft*）誌（2009年9月）に掲載されている。クリューガー論文では第2次世界大戦後に分断国家となった東西ドイツの緊張関係を軸にスポーツ史像を描き出そうとしているが、その力点はオリンピックなどの国際的な競技スポーツの成果をめぐる東西対抗に置かれており、市民社会におけるスポーツクラブやスポーツ実践に関する叙述は少なく、それらが語られる場合でも競技スポーツとの関係で説明されがちである。その理由としては、東ドイツスポーツに関する近年の研究成果を通じて同国スポーツシステムの異常性が鮮明になりつつあるなかで、これら非人間的な競技力政策に対して西ドイツがいかに影響を受け、また対抗しなければならなかったのかを改めて示す必要性があったのではないかと推察される。

有賀郁敏論文「ドイツの社会国家と余暇・スポーツに関する一考察」は、このようなクリューガー論文で描かれた戦後ドイツのスポーツ史像の特徴を踏まえ、当該論文ではほとんどふれられていない戦後西ドイツの「社会国家」（Sozialstaat）の性格と機能に焦点をあてながら、第二の道、ゴールデンプランという1960年代以降の余暇・スポーツにみられる特質を再考しようとしたものである。その際、クリューガー論文で指摘されている国民社会主義（ナチズム）統治下のスポーツと戦後の連邦共和国スポーツとの断続的理解、あるいは自由な市民のイニシアティブや国家の不干渉・不介入といったドイツスポーツ連盟（DSB）の理念に対して、余暇・スポーツ政策面における戦

前・戦後のある種の連続性、また社会国家の特質に規定されたパートナーシップ原理による国家などからの助成と既存社会の秩序形成に向けたスポーツ運動の展開が対置される。くわえて、有賀論文では西ドイツのスポーツに対する批判的見解を踏まえ、統一ドイツにおけるスポーツ運動の課題も提起されている。

漆原良論文「アリゾナ州フェニックス市およびカリフォルニア州サンディエゴ市におけるスポーツ産業展開の一端——スポーツ社会専攻短期留学プログラム開発を目的とした調査報告——」は、アメリカ合衆国のスポーツ関連施設の視察結果の調査報告である。スポーツジャーナリストの生島淳氏がレポートしているように、「ここ数十年で、世界中でさまざまな仕事が大きく変化し」、「近年スポーツの世界で目立つのは、一見、スポーツとは関係ない分野の研究や勉強、もしくはまったく異業種で働いていた人たちがスポーツの分野に大きく進出してきた」（生島淳『スポーツを仕事にする！』pp. 21）。このようにスポーツと社会の接点が多様化・複雑化している現在、その研究・教育を考えるうえでも、既存の枠組みにとらわれない新しい視点が求められている。スポーツ社会専攻では、このような新しい研究・教育を行うフィールドの一つとしてアメリカ合衆国カリフォルニア州サンディエゴ、ならびにアリゾナ州フェニックスでの展開を進めているが、前者については本学部の山下高行教授、川口晋一准教授とも親交が深く、スポーツ社会学界では世界的に著名なジャネット・ハリス（Janet C. Harris）教授がサンディエゴ州立大学で学部長（当時）を務められていた縁から、後者は本学部卒業生を介して現地で広くスポーツマネジメント業務を展開する三原徹氏との交流を契機にそれぞれ開始されたものである。今後広く情報を共有し、専攻ひいては学部における共同研究が進展することを期待したい。

本誌への小特集企画をきっかけにドイツならびにアメリカの研究者、機関と本専攻とのネットワーク形成が具体的に進んだ点は重要な成果である。その意味でもゲスト講師として本学で講演し、また本誌への講演論文の掲載を快諾して下さったミヒャエル・クリューガー教授、ならびにアメリカにおける専攻の教学展開のコーディネートをお願いしたジャネット・ハリス教授に対し、ここに記して感謝申し上げたい。

有賀 郁敏（スポーツ社会専攻長・教授）

漆原 良（スポーツ社会専攻・准教授）